



いたびつ 板櫃 <校訓>
真理の探究
自主躍進

令和6年7月9日(火)発行

校長 栗原 博 巳

北九州市小倉北区白萩町8番1号

HP: www.kita9.ed.jp/itabitsu-j/

<学校教育目標>

自立・共生～自立心にあふれ、他を思いやる心をもった生徒の育成～

<目指す生徒像>

①「時を守り、場を清め、礼を正す」生徒(凡事徹底)

② 自ら考え、正しく判断し、進んで学習や諸活動に取り組む生徒(自立)

③ 思いやりの心を持ち、協力し合って集団生活の向上に努める生徒(共生)

④ 与えられた仕事に対し、役割を果たすことのできる生徒(責任)



「生きる」とは何か? 「いのち」とは何か?

6月23日は、太平洋戦争末期の沖縄戦での戦没者らを悼む「慰霊の日」です。沖縄県内各地では慰霊行事が行われ、日米問わず戦没者の名前が刻まれた沖縄県平和祈念公園(糸満市摩文仁)の「平和の礎(いしじ)」には例年多くの遺族らが訪れました。同公園では午前11時50分から、沖縄県などが主催する沖縄全戦没者追悼式が行われました。

沖縄では、1945年3月26日から約3カ月間、沖縄本島を中心に地上戦が行われ、日米合わせて約20万人が犠牲になりました。同公園の「平和の礎(いしじ)」には国籍、軍民間問わず死者の名が刻まれ、今年は181人が追加されて刻銘数は24万2225人になりました。(参考:朝日新聞)

沖縄「慰霊の日」追悼式では、県立宮古高校(宮古島市)3年の仲間友佑さん(18)が、平和の詩「これから」を朗読しました。現在も世界各地で戦争が起きていることに胸を痛め、「希望がもてるような世界にするためにこれからも祈り続けたい」と語りました。

仲間さんの祖父母は戦後生まれて、体験者などから話を聞く機会が減ったにいいいます。それでも、近年、テレビなどで戦争の映像を目にする機会が増え、「怒りを感じるようになった」と話すそうです。

普段から詩などの創作活動をしているという仲間さん。平和の詩の募集を知り、自分の表現を見てもらいたいとの思いもあって、応募を決めました。題名の「これから」には、平和に対して祈り続け、希望がもてるような世界になってほしいとの意味を込めたといひます。

世界に目を向けると、戦争はまだまだ続いています。「自分ができることは祈ることだ」。そう語る仲間さんは沖縄戦の特徴として、集団自決を挙げ、「死ぬはずのない人が死んでしまった」と声を落とします。詩でも悲惨な状況を表現しました。「泣く我が子を殺すしかなかった／一家で死ぬしかなかった／誰かが始めた争いで」

自身のこれからについて問われると、「宮古島のために働きたい」と応え、「語り部もできるならやってみたい。戦争がいかに駄目かということ伝えていきたい」と力強く話しました。(参考:時事通信)

【7月9日(火)板櫃中学校 平和授業 参考資料】

「これから」 沖縄県立宮古高校 3年 仲間友佑

短い命を知ってか知らずか 蝉が懸命に鳴いている 冬を知らない叫びの中で

僕はまた天を仰いだ あの日から79年の月日が 流れたという

今年十八になった僕の 祖父母も戦後生まれだ

それだけの時が 流れたというのに

あの日 短い命を知るはずもなく

少年少女たちは 誰かが始めた争いで 大きな未来とともに散って逝った

大切な人は突然 誰かが始めた争いで 夏の初めにいなくなった

泣く我が子を殺すしかなかった 一家で死ぬしかなかった

誰かが始めた争いで 常緑の島は色を失くした 誰のための誰の戦争なのだろう

会いたい、帰りたい 話したい、笑いたい そういくら繰り返そうと

誰かが始めた争いが そのすべてを奪い去る

心に落ちた 暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ

微かな光さえも届かぬような 絶望すらもないような 怒りも嘆きも失くしてしまいそうな

深い深い奥底で 懸命に生きてくれた人々が 今日を創った 今日を繋ぎ留めた

両親の命も 僕の命も 友の命も 大切な君の命も すべて

心に落ちた あの戦争の副作用は 人々の口を固く閉ざした

まるで 戦争が悪いことだと 言うてはいけないのだと 口止めするように



思い出したくないほどの あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰いだ 抜けるような青空を 飛行機が横切る

僕にとってあれは 恐れおののくものではない

僕らは雨のように打ちつける 爆弾の怖さも 戦争の「せ」の字も知らない

けれど、常緑の平和を知っている

あの日も 海は青く 同じように太陽が照りつけていた

そういう普遍の中にただ 平和が欠けることの怖さを 僕たちは知っている

人は過ちを繰り返すから 時は無情にも流れていくから

今日まで人々は 恒久の平和を祈り続けた

小さな島で起きた あまりに大きすぎる悲しみを 手を繋ぐように 受け継いできた

それでも世界はまだ繰り返してる

79年の祈りでさえも まだ足りないというのなら それでも変わらないというのなら

もっともっとこれからも 僕らが祈りを繋ぎ続けよう

限りない平和のために 僕ら自身のために

紡ぐ平和が いつか世界のためになる そう信じて

今年もこの6月23日を 平和のために生きている

その素晴らしさを噛みしめながら



(表記は原文のまま)

【参考：広島市 原爆被害の概要】広島市>原爆・平和>被爆の実相・復興・被爆者援護等>原爆被害の概要>原爆被害の概要

昭和20年(1945年)8月6日、月曜日の朝は快晴で、真夏の太陽がのぼると、気温はぐんぐん上昇しました。深夜零時25分に出された空襲警報が午前2時10分に解除され、ようやくまどろみかけていた人々は、午前7時9分、警戒警報のサイレンでたたき起こされました。この時はアメリカ軍機1機が高々度を通り過ぎていただけだったため、警報は午前7時31分に解除されました。一息ついた人々は、防空壕や避難場所から帰宅して遅い朝食をとったり、仕事に出かけたりと、それぞれの1日を始めようとしていました。

この時、広島中央放送局では、情報連絡室から突如、警報発令合図のベルが鳴りました。古田アナウンサーは、警報事務室に駆け込んで原稿を受け取り、スタジオに入るなりブザーを押ししました。「中国軍管区情報! 敵大型3機、西条上空を・・・」と、ここまで読み上げた瞬間、メリメリというすさまじい音と同時に、鉄筋の建物が傾くのを感じ、体が宙に浮き上がりました。

昭和20年(1945年)8月6日午前8時15分。人類史上初めて、広島に原子爆弾が投下されました。原子爆弾は、投下から43秒後、地上600メートルの上空で目くらむ閃光を放って炸裂し、小型の太陽ともいえる灼熱の火球を作りました。

火球の中心温度は摂氏100万度を超え、1秒後には半径200メートルを超える大きさとなり、爆心地周辺の地表面の温度は3000~4000度にも達しました。爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が四方へ放射されるとともに、周囲の空気が膨張して超高圧の爆風となり、これら3つが複雑に作用して大きな被害をもたらしました。原爆による被害の特質は、大量破壊、大量殺りくが瞬時に、かつ無差別に引き起こされたこと、放射線による障害がその後も長期間にわたり人々を苦しめたことにあります。

